トンボと民俗文化（Ⅰ）

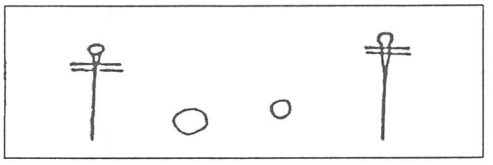
相坂　耕作

はじめに

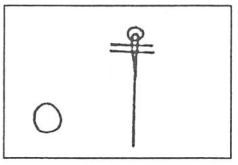
最近トンボの研究が進み立派な生態図鑑や大図鑑が発刊されたり、またビオトープ等やトンボ公園が増えている。反面、トンボの民俗文化面の研究においては決して進んでいるとは言えないようである。そこで今回、筆者の郷土、播磨を中心にトンボに関する民俗文化としての一端を順次紹介していきたい。

銅鐸の絵のトンボ

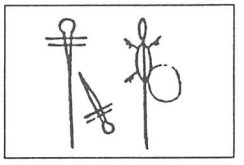
日本は豊葦原瑞穂の国といわれた。縄文時代後期からの水田農耕を営んでからであろう。その後弥生時代になるとトンボの図が銅鐸からでてくる。銅鐸は弥生時代前期の終わりから、後期にかけての遺物といわれ稲作文化が入って間もないころにつくられた。弥生時代につくられた銅鐸430個のうち、原始絵のある銅鐸は40余りある。それらのうちトンボを描いているものは、国宝として東京国立博物館に展示されている香川県出土と伝わる



伝香川県出土銅鐸のトンボ図



神戸市桜ヶ丘出土4号
銅鐸のトンボ図



神戸市桜ヶ丘出土5号
銅鐸のトンボとイモリ

図1　銅鐸に描かれたトンボ図

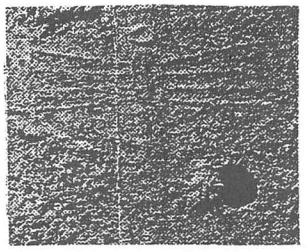


写真1　加茂岩倉遺跡出土銅鐸（部分図）

高さ44cmくらいの銅鐸で全面に12区画の絵にトンボが描かれている。また、兵庫県神戸市灘区桜ヶ丘神岡で昭和39年に出土した4号、5号銅鐸にも全面8区画の中にトンボ絵が描かれている。どちらも高さ40cmくらいで、これも国宝として神戸市立博物館に展示してある。

その他、福井県井向2号銅鐸、滋賀県新庄銅鐸、また最近見つかり話題になった島根県加茂岩倉遺跡出土の18号、35号銅鐸などがある。害虫をたべてくれるトンボへの関心が同じく描かれたカマキリ、クモ（アメンボ）、など捕食昆虫とともに豊作を願う気持ちとうかがえられる（図1.写真1）。

日本の古名の由来

日本の国はまた秋津島（洲・州）とも呼ばれた。この秋津はトンボの古名で古くから日本の国と密接な関係がある。「日本書紀」巻第3神武天皇の条によると、腋上の嗛間丘（奈良県御所市）というところに登って、国見をされたとき

妍哉乎、国を獲つること。内木綿の真さき
国といへども、蜻蛉の臀呫の如くあるかな

これがはじめての「秋津島（蜻蛉島）」の国号の興りという。つまり、神武天皇の31年、夏4月の朔日、天皇は腋上の嗛間の丘に登って、国の中を四方眺め廻して言うには、「ああ美しい国を得たものだ。日本（大和）は青い山々を周囲にめぐらし、真木綿の内のうつろなように狭い国ではあるが、その有様は、トンボが尾を返して2匹つながっているようにも見える」。つまり、日本の地形（領土）はトンボが交尾している形のようだ、とこう言った。ここから初めて、秋津洲の名を生じた。ということである。

また、「日本書紀」巻14や「古事記」下の巻の雄略天皇の条には、

阿岐豆野にいでまして御猟せす時に、天皇
御呉床にましましけるに蚋御腕をくいつけると
蜻蛉きてその蚋をくいて飛びいにき

雄略天皇の4年、秋8月の18日、天皇は吉野の宮に行幸した。20日、吉野河の上流の小野に行き山の番をする者たちに命じて狩のけものを狩り出させ、自身、矢を番えて獲物をまっていた。そこで、一匹のアブが天皇の腕を刺したが、そこにトンボが飛んできて、そのアブを捕食して飛んでいったという。それ以後、トンボを「勝虫」と称え、縁起のよい昆虫として武家時代には勝利のしるしにされたということである。

その時、天皇はトンボの仕業を悦び、役人たちに向かって、「誰か私の代わりに、トンボをほめた歌を詠んでみないか。」といったが、誰ひとり、詠むものは出ず、天皇みずから次のような歌を詠んだ。

大和の　小武羅(をむら)の嶽に
獣伏すと　誰かこの事　大前に申す
大君は　其こを聞かして
玉纏の　呉床(あぐら)に立ちし
倭文纏の　呉床に立ちし
獣待つと　我がいませば
さ猪待つと　我が立たせば
手腓(たこむら)に　虻掻き着き
その虻を　蜻蛉早や食ひ
這う虫も　大君に奉らふ
汝が形は　置かむ　蜻蛉島大和

つまり、「大和の小武羅の岳に、鹿猪の狩のけものがひそんでいると、大君の前にこの事を申し上げる者は誰か？

大君はそれをお聞きになり、玉を巻いて飾りとした足台に腰を掛けて、さて狩りのけものを待っている私がいると、猪を待って私がいると、腕のふとり肉にアブが取りつき、そのアブをあっというまに、トンボがきて食ってしまった。このように空を飛ぶ虫までが、我が大君に仕えまつるのだ。お前の形見をここに残して、この国の名を蜻蛉島大和と呼ぶことにしよう。」

そこで蜻蛉をほめて、この土地を名づけて蜻蛉野と言った。これが「日本書紀」である。

一方「古事記」では、雄略天皇が吉野の宮へ出かけた折のこと、阿岐豆野で狩をして遊んだ。その時、天皇が足台の上に坐っていると、虻が飛んできて腕を刺した。すると続いて蜻蛉が来て、その虻を食って飛び去った。天皇はこれに興を得て、歌を詠んだ。

み吉野の　小牟漏(をむろ)が嶽に
獣伏すと　誰そ　大前に申す
やすみしし　我が大君の
獣待つと　呉床(あぐら)にいまし
白妙の　袖着備ふ
手腓(たこむら)に　虻掻き着き
その虻を　蜻蛉早咋ひ
かくの如　名に負はむと
そらみつ　大和の国を　蜻蛉島とふ

つまり、「吉野の国の、小牟漏が岳に、鹿猪の狩のけものがひそんでいると、大君の前に申し上げる者は誰か？

天下をしろしめす我が大君は、ゆったりと足台に坐り、白栲を織った袖着をつけて、狩のけものを待っていると、腕のふとり肉にアブが取りつき、そのアブをあっというまに、トンボが来て食ってしまった。このようにトンボまでが、その名を受けて立とうとするゆえに、山々の聳り満つ大和の国を、蜻蛉島というのである。」

そこでこの時から、この野を阿岐豆野と言うのである。という。

多少「日本書紀」と「古事記」ではニュアンスが違うが大まかには同じである。

涅槃図

涅槃図の歴史は釈迦が涅槃に入る光景を絵画等で表現することであり、釈迦誕生のインドから始まった。涅槃図は八本の沙羅双樹、天より降りる摩耶夫人などが表されており、大きく分けて2つの形式がある。藤原時代から鎌倉時代にかけて釈迦を大きく画面中心に描いたものと、鎌倉中後期の釈迦を小さく周囲の会衆を多くする図がある。動物は涅槃図に不可欠な動物としてシシ(ライオン)が描かれた。現在、最古の涅槃図として金剛峯寺のものにはシシ1頭のみが描かれているそうだ。その後、鎌倉中後期になると、爬虫類や昆虫まで描かれ80を越す数の動物を描くようになったという。

昆虫の中では、石山寺に鎌倉前期に描かれた現在最古の涅槃図があるが、描かれた昆虫はハチである。京都国立博物館の涅槃図には虫としてクモ、イナゴがあり、常楽寺にはチョウがある。園城寺には鎌倉後期の涅槃図としてトンボが描かれている。同じく甚目寺には鎌倉時代の涅槃図にコオロギとともにトンボが描かれているという。禅林寺の涅槃図はさらにムカデ、コオロギ、アリ、ハチとともにトンボがある。浄土宗の寺、京都知恩寺には鎌倉末期の涅槃図の中に、動物画の頂点となすほど多くの動物が描かれ、虫ではクモ、ゴキブリ、コオロギ、バッタ、チョウ、ハチとともにトンボがある。播磨地方では、姫路市にある書写山円教寺に、国の重要文化財食堂の中に展示してある室町末期の涅槃図にカマキリ、チョウ、ムカデとともにトンボが描かれている。童謡「赤とんぼ」の街で知られる龍野市には「赤とんぼ」の作詞者、三木露風の筆塚がある如来寺から狩野永納筆の涅槃図が発見され話題となった。慶安4年のこの図にもチョウとともにトンボが描かれている。

江戸時代のトンボ図

森野藤助通貞(1690-1767)の画いた「松山本草」の写生図にはオニヤンマ、ギンヤンマ、カトリヤンマらしいトンボ図が描かれている。

森春渓(1820歿)は徳川中期の画家で名は有煌、字は仲禿といい春渓は号である。春渓の画に「肘

下選蠕」(文政4年刊・1821)があり、虫類の写生図の木版画帖にコオニヤンマのようなトンボがある。

また、肉筆図で「蟹虫図帖」(ライデン民族博物館所蔵)には3種類のトンボが描かれている。増山雪斎(1754)は伊勢国長島藩主で採集した虫を凝って画いた「蟲豸帖」があるが、そのなかに展翅された形と横倒しのオニヤンマがみられる。飯室楽圃(1789-1859)は「蟲譜図説」にオオヤマトンボと記したオニヤンマ図をリアルに画いている。

渡辺華山(1793-1841)は画家で田原藩主の家老であり、また蘭学者であるが、「翎毛蟲魚冊」にはシオカラトンボが画かれているという。吉田雀巣(1805-1859)は「蟲譜」のなかに「蜻蛉譜」を画いた。その他各地にも古いトンボ図があるかもしれない。

トンボと武家文化

世界文化遺産の国宝姫路城には慶長年間に大天守の床梁、貫、桁等の継手に多種類の絵合番付が使われていた(写真2)。その中にトンボの絵が描かれている。絵合番付とは数多くの部材を扱う際、接合部を間違わないために大工が印す絵の記号のことで矢立で書いたものである。トンボの真直ぐに飛んで、決して後戻りが出来ないという性質を重視されたため、戦国時代に「勝虫」として尊ばれたトンボは、絵合番付を含め多くの武具や装飾に使われた。戦場に出かける武士の心得と士気を表すと共に常に前進して、勝利への祈願ともなった。

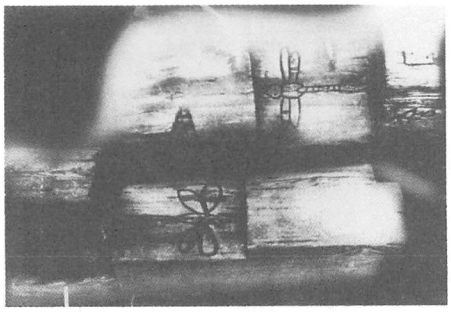


写真2　姫路城用材木組の絵合番付のトンボ

「類聚名物考」には「蜻蛉は空に住みて押付けを見せぬ物故に武器に付けるといへり」とあり、敵に後を見せぬとの意味からであるという。それらは、今でいう美術工芸品となっている。例えば、忠臣蔵で有名な赤穂城の三の丸に大石神社があるが、その境内に四十七士の遺品・書状などが展示してある義士宝物殿がある。その別館には、宝永3年以降、赤穂城の城主となった森家の遠祖、森可成公(森蘭丸の父)が使用された遺愛の品々が収蔵されている。その中に、金梨地の馬の鞍や鐙があるが、これらにはところどころに純金で、これぞ「勝虫」と思われるようなトンボがあしらわれている(写真3)。また、龍野市には脇坂藩主のトンボの鐙が龍野市立歴史資料館に保存されている。これは赤い漆地にトンボの蒔絵が施され素晴らしいものである(写真4)。姫路市にある兵庫県立歴史博物館には、備中足守藩主木下家伝来の緋威金小札二枚胴具足の前立兜にトンボがあしらってある(写真5)。同じく勝虫兜として赤穂郡上郡町にある播磨昆虫民俗資料館には、江戸時代の茶漆塗四十六間筋兜がある。この兜は眉庇に獅子と牡丹が描かれ、前面には天皇の祖神として崇拝された「天照皇大神」とある。雄略天皇の勝虫逸話を示すような威厳ある大型トンボが前立についている(写真6)。また、同館には、勝虫として戦国武将が勝利を願って使用したと思える、鍛えた鉄地にトンボ模様を浮き彫りにした刀の鐔も所蔵されている(写真7)。なかには神崎郡香寺町にある日本玩具博物館所蔵の五月節句の飾り物の一つである、甲冑飾りの弓矢台にも対のトンボが紋章としてついている(写真8)。揖保郡揖保川町新在家には、国の重要文化財である永富家住宅があるが、江戸時代の地方豪農の生活をしのばせる豪壮な住宅である。永富家は龍野藩の財政を助けるうえに、たびたび功績のあった家柄なので、藩から在郷家臣という武士並みの特別待遇を受けていた。永富家は十代を数える旧家で、元鹿島建設会長の故鹿島守之助の実家である。この永富家には文化・文政時代の文化財が伝わっている。なかに大久保ゆくの書状に「勝虫」模様のトンボの美しい版画がある(写真9)。おそらく京都あたりの品であろうとされている。この手紙は農村大家の婦女子の教養をうかがい知るもので、筆者大久保ゆくは、青野原新田開拓の願主の家柄に生まれ、夫喜一郎は永富定政の三男勝蔵で、出でて婿養子として大久保家を嗣いだ人である。手紙は養母にあたる定政の妻とみに宛てたものという。トンボは昆虫の中の王者ともいわれ、勝虫とともに戦争中は勝軍虫と呼ばれ武運目出度い象徴に用いられたという。特に上海事変後には女性の着物や帯の模様を中心としてありとあらゆるものにトンボのマークがつけられた。オニヤンマやヤンマの類が威風堂々と飛翔するさまは、雄々しく感じられる。

家　紋

われわれの家にはシンボルとして家紋がある。家紋は紋所、定紋ともいいう。そもそも家紋とは「家の印しの象徴を図柄化」したもので最初は個人の紋章であったの次第に世襲され家紋となった。家紋の起こりは平安時代の貴族社会である。トン

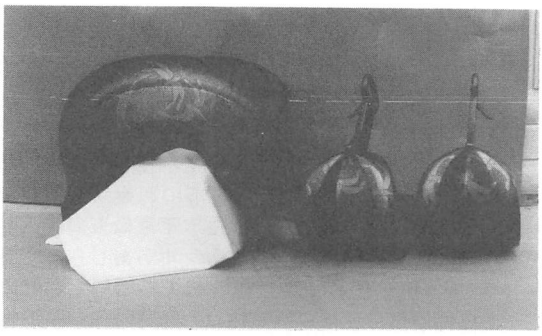


写真3　馬具のトンボ（赤穂市大石神社蔵）

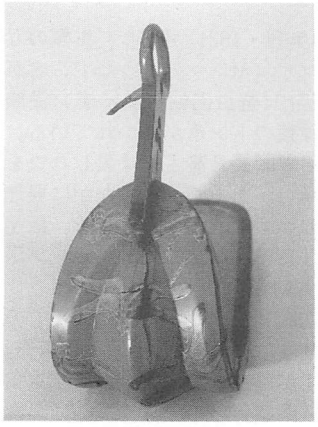


写真4　トンボの蒔絵が施された鐙
（龍野歴史資料館・寄託品）

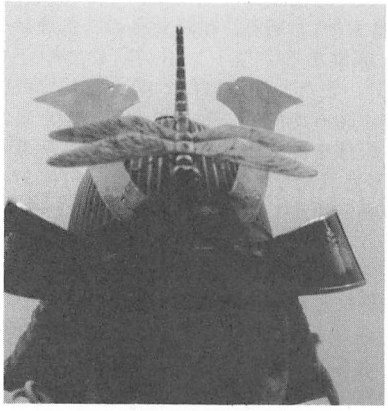


写真5　木下家伝来のトンボの前立兜
（兵庫県立歴史博物館蔵）

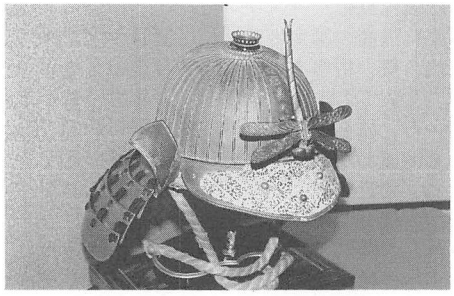


写真6　江戸時代の茶漆塗46間筋兜
（播磨昆虫民俗資料館蔵）

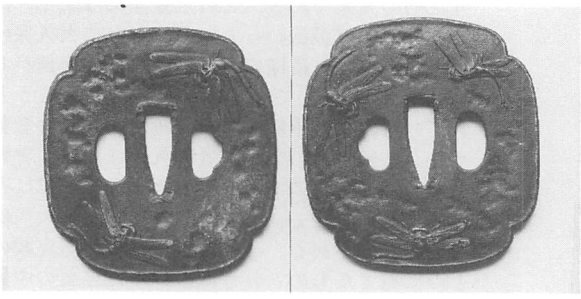


写真7　勝虫トンボ模様の鐔 裏表
（播磨昆虫民俗資料館蔵）

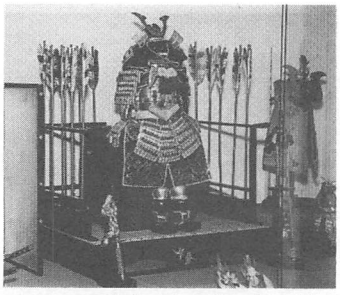


写真8　明治末～大正期の甲冑飾り
（日本玩具博物館蔵）

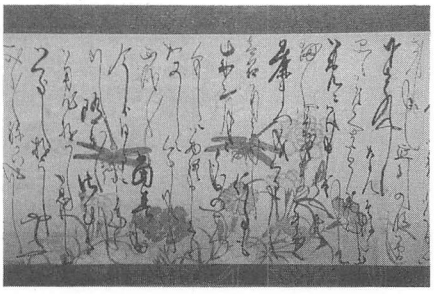


写真9　永富家の書状、トンボ模様が刷込んである

ボを家紋として用いた意味は、やはり「勝虫」といわれ、尚武的な意味に基づいたものであるという。

戦国時代、武士の間で一族の結束や士気の鼓舞、敵・味方の識別等に成立したものとされる。とくに武士の着用する箙には多くのトンボの文様の描かれたものが用いられた。そのわけは「愚得随筆」に次のように書かれている。「箙の紋に必ず蜻蛉をつける故実なり。札家にヌルデを勝軍木、オモダカを勝軍草、トンボを勝軍虫という故に、蜻蛉を箙の紋につけるという」(千鹿野茂著・日本家紋総鑑)。また、同著の解説によると、蜻蛉紋の使用家は武蔵七党の有力武士である金子氏であるという。金子氏は元弘3年の鎌倉討幕に参加し功績があり、護良親王の令旨が伝わっている名族である。子孫は土佐の山内家に仕え、三つ蜻蛉紋を用い、相模国高座郡海老名村の金子氏は二つ蜻蛉紋を用いているという。時代としては鎌倉時代からとのことである。家紋のなかの昆虫や虫類でもっとも多くつかわれているのは「蝶」であり、このほか蜘蛛、蝉、百足などがある。

陰糸輪に一つ蜻蛉
糸輪に蜻蛉
対い蜻蛉
丸に対い蜻蛉-1
丸に対い蜻蛉-2
変わり対い蜻蛉
丸に変わり対い蜻蛉
丸に三つ蜻蛉
丸に対い下がり稲に蜻蛉

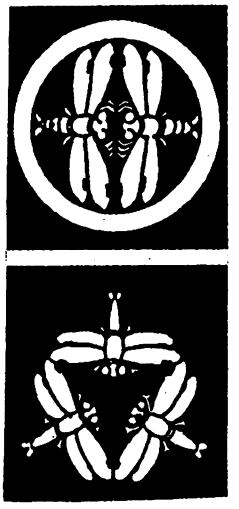


図2　蜻蛉の家紋(千鹿野茂著・日本家紋総鑑1993による)

＜参考文献・引用文献＞

福永武彦訳(1976)　古事記・日本書紀　日本古典文庫1　河出書房新社
中野玄三　(1986)　日本人の動物画　朝日新聞社
朝日新聞社(1988)　江戸の動植物図　朝日新聞社
相坂耕作　(1988)　播磨の昆虫　神戸新聞総合出版センター
岡本大二郎(1990)　虫の日本史　新人物往来社
奥本大三郎(1993)　虫の文学誌　ＮＨＫ出版
千鹿野茂　(1993)　日本家紋総鑑　角川書店
小西正泰　(1994)　日本人と虫の文化史　歴史博物館信玄公宝物館
日本玩具博物館(1997)　おもちゃと遊びNo.16　日本玩具博物館館報
芦田正次郎(1999)　動物信仰事典　北辰堂